

CONTENTS

第 20 回研究大会のご案内-----	(1)	入会のご案内と会費納入のお願い-----	(4)
会員研究業績-----	(4)	会費領収書発行についてのお願い-----	(5)
新規入会員(2014年11月～2015年3月)--	(4)	機関誌『東アジア近代史』個人論文募集のご案内--	(5)

第20回研究大会のご案内

今年度の研究大会は、2015年6月20日（土）・21日（日）の両日、東京女子大学24号館を会場として開催されます。

20日は、午前中に鈴木隆春（国立公文書館）、趙国（早稲田大学）、岡崎滋樹（立命館大学）、刁成林（立命館大学）の4氏による自由論題報告をおこないます。午後からは、檜山幸夫氏（中京大学）の司会により、「第2回 大学の保有する歴史資料の現状と課題」のテーマで歴史資料セッションを開催します。はじめに岩壁義光氏（法政大学）から趣旨説明をいただいた後、藤原秀之氏（早稲田大学）、伊藤幸司氏（九州大学）、原京子氏（法政大学大学院）、岩壁義光氏（法政大学）の4氏のご報告をいただいて、総合討論を実施いたします。また、セッション終了後には、総会及び懇親会も予定されております。

21日は、「『冊封・朝貢』体制再考—近代東アジアの国際秩序をめぐる外交と言説—」と題した大会シンポジウムを開催いたします。まず、青山治世氏（亜細亜大学）から趣旨説明をいただいた後、大澤博明氏（熊本大学）、酒井裕美氏（大阪大学）、望月直人氏（京都大学）からのご報告をいただきます。昼食休憩を挟んで、午後からは青木雅浩氏（早稲田大学）、小泉順子氏（京都大学）、茂木敏夫氏（東京女子大学）からご報告をいただいた後、岡本隆司氏（京都府立大学）、三谷博氏（跡見学園女子大学）の両氏からコメントをいただきます。その後、佐々木揚氏（本学会副会長）の司会の下、全体討論をおこないます。

以下に、歴史資料セッションと大会シンポジウムの開催趣意文を掲載いたします。会員の皆様方には、ふるってご参加いただきますようお願いいたします。

なお、研究大会に関する詳細は学会ホームページをご参照ください。

歴史資料セッション趣旨文 「第2回 大学の保有する歴史資料の現状と課題」

歴史学研究の基礎をなす歴史資料の公開と共用について、本学会では2001年「歴史史料特別セッション」を開催し、以降シンポジウムを重ねてきた。その背景には、「情報公開

法」の施行を前に、多くの公文書が廃棄されるという現実があった。

その後、2011年「公文書管理法」および「公文書管理法施行令」の施行により、国の行政機関については「特定歴史公文書」の保存と公開が、問題を含みながらもその歩みを始め、また地方公共団体にも法的な整備を始めているところも出てきている。

行政機関に於ける文書の保管・整理・公開の流れに、大学においても大学アーカイブズの保管・整理・公開へと動きをみせている。その一方、大学には教員が研究のために収集した資料や寄贈などによる歴史資料も数多く残され、その実態と問題点について十分な理解や認識がなされているとは言い難い。こうしたことから、昨年度、本セッションでは「大学の保有する歴史資料の現状と課題」をテーマとして、その実態を探ることを試みた。その結果、大学の保有する歴史資料が極めて多種多様であり、さらに歴史資料についての認識もまた一様ではなく、さらなる実態の把握が必要ではないかとの考えに至った。このため、本年度も引き続き大学の保有する歴史資料についてその保有実態や公開、またこれに伴う問題点について考えることとした。

本年度は、大学の図書館や研究室が保有する歴史資料の公開と課題、さらにそれとの比較の視点から行政機関に於ける公開例の以下4報告を用意した。

伊藤幸司氏（九州大学比較社会文化研究院）「桜圃寺内文庫と寺内正毅関係資料」
山口県立大学図書館桜圃文庫を中心に寺内正毅・寿一父子の寺内家資料の公開の現状と課題について

藤原秀之氏（早稲田大学戸山図書館）「歴史資料の保存とデジタルアーカイブ～古典籍総合データベースを例として～」

早稲田大学図書館が保有する大隈文書を含む歴史資料を、インターネットより利用を可能としている「古典籍総合データベース」の構築と、今日的課題について

原京子氏（法政大学大学院院生）「板澤蘭学資料の公開について」
法政大学史学研究室が現在進めている元法政大学教授板沢武雄氏旧蔵の海外交渉史資料である「板澤文庫」の公開準備について

岩壁義光氏（法政大学大学院）「伊藤博文文書『秘書類纂』の公開」
大学の保有する歴史資料の公開との比較から、伊藤家に伝来した「秘書類纂」の宮内省への寄贈過程と公的機関である宮内庁書陵部における公開経緯について

本歴史資料セッションが、昨年度に引き続き大学の保有する多種多様な歴史資料の実態を知る一助となり、さらにその保存と公開について、今後を考える機会としたい。

大会シンポジウム

『冊封・朝貢』体制再考－近代東アジアの国際秩序をめぐる外交と言説－

21世紀における中国の抬頭にともない、前近代における中国王朝の世界観や、そのアジアの国際関係における意義が注目されつつある。しかしながら、その説明原理として使われる「冊封・朝貢」体制については、いまだ学説的な整理が不十分な状態であり、実証面での裏づけも必ずしも十分とはいえない。では、かように周知でありながらその内容に不明確さを残す「冊封・朝貢」体制論の性格とは、いったいどこから来るものなのか。

歴史研究では以前から、「冊封・朝貢」体制と呼ばれるものが、そもそも曖昧で不明確な

存在であり、その曖昧さこそが、それぞれの時代の政治状況と符合しやすい利点ともなっていたことが指摘されてきた。東アジア近代史でも、日清戦争以前の朝鮮半島をめぐる国際政治において、「清韓」関係の曖昧さこそが勢力均衡のための緩衝機能を果たしていたともいわれている。さらには、1960年代に登場した西嶋定生の「冊封体制」論自体、「世界史の基本法則」や「世界帝国」論といった当時の歴史学界の潮流の影響を受け、「東アジアの中の日本」を考えるとという同時代的な問題意識のもとに提起されたものであった。

このように、「冊封・朝貢」体制論は、元来の不明確な性格も含め、それぞれの時代状況の中で“活用”されてきたといえよう。そうした変幻自在な「冊封・朝貢」像を理解し、その特質を掴むためには、「前近代／近代」の垣根を越えて、また東南アジアをも含む「東アジア史」の枠組みで、「冊封・朝貢」体制（論）を再考する必要がある。本シンポジウムでは、東アジア近代史の中で「冊封・朝貢」がどのように論じられてきたのか、それがいかなる政治状況や文脈の中で生じてきたのかを多角的に明らかにすることで、「冊封・朝貢」体制（論）の根底にある問題を炙りだし、現代も見すえた研究の深化に寄与したいと考える。

こうした目的にアプローチするため、2つの経路を用意する必要がある。1つは、「冊封・朝貢」の枠組みが、それが存在していた時代にいかなる形で機能し、中国と近隣諸国が「冊封・朝貢」をどのように認識していたのか、という問題である。今一つは、「冊封・朝貢」が過去のものとなってから、それがいかに記憶されたのか、という問題である。

今回のシンポジウムでは、まず第1部で、「冊封・朝貢」が存在した時期の国際政治において、各国からどのように位置付けられたのか、議論を深める。日清関係を研究する大澤博明氏に、日本の清韓関係観について新たな観点で報告していただき、近代朝鮮の対外関係を研究する酒井裕美氏には、朝鮮の対清・対日関係の変容について漁業交渉を事例に論じていただく。さらに、近代中国史を研究する望月直人氏が、19世紀における中国・清朝とベトナム・阮朝間における冊封儀礼をめぐる駆け引きとその政治的意味について論じる。

第2部では、「冊封・朝貢」が過去のものとなってから、どのように語られ続けてきたのか、認識の深化・革新を目指す。近代モンゴル史の研究を進めている青木雅浩氏には、モンゴル・ソ連関係との関連も視野に入れて、モンゴル知識人がかつてのモンゴルと清朝の関係をいかに認識したかを論じていただく。近代タイにおけるナショナリズムと歴史叙述について研究する小泉順子氏には、近代タイ・ラタナコーシン朝における年代記の改訂と進貢(chimkong)の問題について報告いただく。近代中国の対外関係を思想面から研究する茂木敏夫氏には、「冊封・朝貢」が語られる「3つの場」を想定し、その相互関係を論じていただく。

このようにして本シンポジウムでは、様々な「冊封・朝貢」像とその背景について議論を深め、中国と東アジア諸国、さらには世界全体にとって、「冊封・朝貢」が持つ意味を考える機会を提供することを目指したい。

会員研究業績

朴炳渉「サンフランシスコ講和条約と千島・竹島=独島問題」(2)(3)『北東アジア文化研

究』39号(2014年11月) <http://www.kr-jp.net/ronbun/park/park-1411SF2.pdf>
小池求『20世紀初頭の清朝とドイツ:多元的国際環境下の双方向性』(勁草書房、2015年)

※ 会員の研究業績はニューズレターに掲載しています。郵送またはメール等で研究業績目録(論文・著書とも)を事務局宛にお送りください。

新規入会員(2014年11月~2015年3月)

下記の会員申請を理事会で承認しました(順不同、敬称略)。

金賢貞(東京大学総合文化研究科)、刁成林(立命館大学経済学研究科)、岡崎滋樹(立命館大学経済学研究科)、鈴木隆春(国立公文書館調査員)、諸洪一(札幌学院大学人文学部教授)

前号に誤りがありましたので、訂正し改めて掲載いたします。

白戸健一郎(日本学術振興会特別研究員)

入会のご案内

本会に入会を希望される方は、入会申込書(下記事務局にご請求ください)または東アジア近代史学会のホームページの入会申し込みフォームに所定の事項をご記入の上、事務局までお送りください。年会費は5000円(大学院生・留学生は3000円)です。下記の口座にお振り込みください。

郵便振替口座 口座番号 00180-6-580867 口座名 東アジア近代史学会

会費納入と領収書発行についてお願い

会員の方で、会費未納の方は、機関誌刊行や会の運営上支障を来しますので、すみやかにご納入をお願い致します。会費を大学事務を通して納入(国立大学などでの公費支払)される場合は、納入者が不明な場合が生じておりますので、ご面倒ですが納入の際にご一報ください。本会では、事務手続きの簡略化と経費節減のため、会費を振り込まれました、ゆうちょ銀行(郵便局)、その他金融機関で発行する受領証をもって本会の領収書とさせていただきます。

会告:会員資格について

昨年度の総会において東アジア近代史学会規約の改正が承認されました。会員資格に関する規定について、以下のように退会規定が設けられました。

第四条 本会の目的に賛同し、理事会の承認を経た者は会員となることができる。

二 会員は、会誌、ニューズレター等の配布を受け、本会の行う会合や事業に参加し、会誌に投稿することができる。

三 会員は、会費を納入しなければならない。会費3年度分以上の未納者は、特別の事情がないかぎり、退会したものとみなし、理事会において退会の承認をすることができる。

現在においては、3年度分以上未納入会員に対する機関誌の発送は行っておりませんが、会籍は維持されております。再入会などに関する具体的手続きにつきましては本年度中に理事会において決定する予定です。

機関誌『東アジア近代史』個人論文募集のご案内

当学会機関誌『東アジア近代史』第19号（2016年3月刊行予定）に掲載する個人論文を募集します。下記の執筆要項をご参照いただき、ふるってご投稿ください。なお、投稿期限は2015年10月末日、投稿先および問い合わせ先は東アジア近代史学会事務局（奥付参照）となっております。なお10月・4月の常任理事会において投稿規定が改正されました。第8項・第12項・第14項のアンダー・ライン部分が改正箇所です（第19号からの適用です）。

『東アジア近代史』執筆要項（平成26年10月改正）

- 1 原稿は筆者オリジナルの書き下ろしのものとします。
- 2 原稿の分量は、以下の通りです。（四百字詰め原稿用紙換算。図・表・注を含む。）
論 文…50枚以内 研究ノート…30枚以内
史料紹介…30枚以内 書 評…10枚以内
- 3 原稿は1桁1字、縦書き、完全成稿とします。なおワープロ・パソコン原稿は、縦書き、40字×30行で、A4判（横）に出力願います。
- 4 ワープロ・パソコン原稿は電子情報を送付下さい。テキスト形式、ワード、一太郎の何れも可です。必要に応じてエクセルの表も使用可です。
- 5 字体は、原則として新字体とします。
- 6 年号は西暦（漢数字）を原則とします。元号を用いる場合は括弧（ ）で西暦も表示して下さい。[例 一九四五年・一九四五（昭和二〇）年・昭和二〇（一九四五）年]
- 7 注は、本文末尾に一括して掲げてください。
- 8 注番号は、本文該当箇所の右脇に（1）、（2）、…のように付します。末尾の注も（1）、（2）、…で記述してください。もし不可能な場合は、word等の文末註機能を使用してもかまいません。
- 9 写真図版（モノクロ）の掲載は可能です。
- 10 図版、表などは、原稿上に赤字で掲載箇所を指示してください。ただし、掲載は編集の都合で前後する場合があります。
- 11 校正は、原則として2回です。
- 12 論文執筆者には、掲載号を3部、書評執筆者には2部、寄贈します。

- 13 論文の抜刷が必要な場合は、初校ゲラ送付時、指示してください。なお、実費を御負担いただきます。
- 14 投稿原稿の提出期限は、毎年度10月末とし、投稿原稿の審査結果は、毎年度の2月までに通知します。
- 15 掲載原稿の転載は、原則として1年間のご遠慮下さい。また転載にあたっては必ず本学会の許可を得て下さい。
- 16 原稿の送付先は本学会事務局とします。

(東アジア近代史学会機関誌編集委員会)

〔編集後記〕

今号は、6月に開催されます第20回研究大会の特集記事が中心となっております。内容盛りだくさんの研究大会ですので、両日も午前中からの開催となります。東京女子大学までは、最寄り駅から徒歩でお出でになる会員の方も多いためと思いますので、お時間には余裕をもってご参加いただきますようお願いいたします。なお、アクセス方法については、学会ホームページの「研究大会」の項、または麗澤大学ホームページの「交通アクセス」の項をご参照ください。

今年「戦後70年」の節目の年です。日本と東アジア諸国との関係が「不正常」な状態にある現在だからこそ、東アジア地域に存在し、その後の東アジア地域の国際秩序に大きな影響を与えた「冊封・朝貢」体制について検討する大会シンポジウム『冊封・朝貢』体制再考－近代東アジアの国際秩序をめぐる外交と言説－は、時宜にかなったテーマです。

また、歴史資料セッションは、昨年に引き続き「大学の保有する歴史資料の現状と課題」についての議論を深めます。大学が保有する歴史資料に関わる問題の所在について論じた昨年の議論を踏まえ、今年は大学保有資料の公開や活用の側面について検討する予定です。

新進気鋭の研究者による自由論壇報告を含めて、プログラムのすべてにおいて活発な議論を展開させていきたいと準備を進めております。時節柄ご多用の中とは存じますが、多くの皆様にご参加いただき、充実した研究大会の開催にご協力いただきますよう、お願いいたします。(藤波)

「東アジア近代史学会会報」第38号 2015年4月27日

発行 東アジア近代史学会 会長 井口和起

編集 東アジア近代史学会ニューズレター編集委員会(担当:藤波潔)

東アジア近代史学会事務局

〒277-8686 千葉県柏市光ケ丘2-1-1 麗澤大学 櫻井研究室内

TEL 090-9315-8574

E-mail アドレス modern_east_asia_jm@hotmail.co.jp

事務局長 櫻井良樹

URL <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jameah/>